

【 復活讃詞 第1調 】

きゅ うせ え いしゅよ、イ ウ デ ヤ の ひ と は か を  
 救 世 主 人 墓  
 ふ うじ て 、 へ い そ つ なんぢの い さ ぎ よ き み を  
 封 兵 卒 爾 潔 軀  
 ま も る と き 、 なんぢは み っ か め に ふ く か つ  
 守 時 爾 三 日 目 復 活  
 し て 、 せ か い に い の ち を た ま え り 。  
 世 界 生 命 賜  
 ゆ え に て ん ぐ ん は なんぢの い の ち を ほ ど こ す の  
 故 天 軍 爾 生 命 施  
 しゅ に よ べ り 、 ハ リ ス ト ス よ 、 こ う え い は  
 主 呼 光 榮  
 なんぢの ふ く か つ に き し 、 こ お う え い は なんぢ  
 爾 復 活 歸 し 光 榮 爾  
 の く に に き す 、 ひ と り ひ と を い つ く し む  
 國 歸 獨 人 慈  
 しゅ よ 、 こ う え い は なんぢの お も ん ぱ か り に  
 主 光 榮 爾 慮  
 き す 。  
 歸

【 諸神父の讃詞 第8調 】

こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 。  
 光 榮 父 子 聖 神 歸

あ が め ほ め ら る る か な ハ リ ス ト ス わ れ ら の か み 、  
 崇 讚 哉 我 等 神

こ お み よ う と し て ち じ ょ う に わ が し ょ し ん ぷ を た 立  
 光 明 地 上 我 諸 神 父 立

て 、 か れ ら を も っ て わ れ ら し ゅ う を ま こ と  
 彼 等 以 我 等 衆 眞

の お し え に み ち び き し も の や 、 い た り て じ 慈  
 教 導 者 至 慈

れ ん な る し ゅ よ 、 こ う え い は な ん ぢ に き 歸  
 憐 主 光 榮 爾 ぢ に 歸

す 。

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】

い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
 今 何 時 世 世

し と と ひ と し く ど う ざ な る も の 、 ち ゅ う  
 使 徒 等 同 座 者 忠

じ つ に し て し ん ち な る ハ リ ス ト ス の え き し ゃ 、 せ い  
 實 神 智 役 者 聖

な る し ん に え ら ば れ た る ふ え 、 ハ リ ス ト ス の あ い  
 神 撰 笛 愛

に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こ う  
 満 器 我 國 光

し ょ お し ゃ 、 あ し と し ゆ き ょ う せ い ニ コ ラ イ  
 照 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ 、 な ん ぢ の ぼ く ぐ ん の た あ め 、 お よ び  
 爾 羊 群 爲 及

ぜん せ か い の た め に 、 い の ち を た も う せ い  
 全 世 界 爲 生 命 賜 聖

さん しゃ に い の り た ま え 。  
 三 者 祈 給

司祭) ( 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て  
 歌頌せられ、ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物  
 を無より有となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を  
 以て之を飾り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其  
 救の爲に痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於て  
 も、爾が聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉  
 るに堪うる者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受  
 け、爾の仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我  
 が靈と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ  
 給え、聖なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依り  
 てなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る  
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め  
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い  
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ  
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、  
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん  
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う  
聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのものよ、われらを  
 毅 聖 常 生 者 我 等 を

あわれめよ。  
 憐

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國  
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、 )

【 提綱 (プロキメン) 主日第1調 及び第4調諸祖の歌 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。  
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、我等爾を頼むが如く、爾の憐を我等に垂れ給え、

しゅよ、われらなんぢをたのむがごとく、  
 主 我 等 爾 頼 如

なんぢのあわれみをわれらにたれたま  
 爾 憐 我 等 垂 給

え。

誦經) 義人よ、主の爲に喜べ、讚榮するは義者に適う、

しゅよ、われらなんぢをたのむがごとく、  
 主 我 等 爾 頼 如

な んぢの あわれ みを われら に た れ た ま  
爾 憐 我 等 垂 給  
え 。

誦經) <sup>しゅわ せんぞ かみ なんぢ さんよう なんぢ な よよ さんびさんえい</sup> 主我が先祖の神よ、爾は讃揚せられ、爾の名は世々に讃美讃榮せらる、

しゅ わ が せんぞ の か み よ 、 なんぢ は さ ん よ う せ  
主 我 先祖 神 爾 讃 揚  
ら れ 、 なんぢ の な は よ よ に さんびさんえい せ  
爾 名 世 世 讃 美 讃 榮  
ら る 。

【 使徒經 (アポストロス) 188 端 コリント後書 9 章 6 節~11 節 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>せいしと じん たつ しょ よみ</sup> 聖使徒パウエルがコリント人に達する書の讀、

司祭) <sup>つつし き</sup> 謹みて聽くべし、

誦經) <sup>けいてい とぼ ま もの とぼ か ゆたか ま もの ゆたか か ひとのおのそのこころ</sup> 兄弟よ、乏しく稼く者は乏しく穡り、豊に稼く者は豊に穡らん。人各其心の

<sup>ほつ ところ したが うれい よ あら し な あら ほどこ けだしかみ たのし</sup> 欲する所に随い、憂に由るに非ず、強いて爲すに非ずして施すべし、蓋神は樂

<sup>あた もの あい かつかみ なんぢら しょおん と よく なんぢらつね およそ</sup> みて與うる者を愛す。且神は爾等を諸恩に富ましめんことを能す、爾等常に凡の

<sup>こと おい た およそ ぜんじ な ゆたか ため する ごと いわ</sup> 事に於て足らざるなくして、凡の善事を爲すに饒ならん爲なり、録されしが如し、云く、

<sup>かれ さん ひんじゃ ほどこ そのぎ よよ せん ま もの たね あた しょく ため パン</sup> 彼は散じて、貧者に施せり、其義は世々に存すと。播く者に種を與え、食の爲に餅

<sup>そな もの ねが なんぢら ま たね そな かつふや またなんぢら ぎ み ま</sup> を備うる者は、願わくは爾等が播く種を備え且殖し、又爾等の義の實を益さんことを、

<sup>なんぢら およそ こと と よ ひる ほどこ え ため こ われら よ かみ たてまつ</sup> 爾等が凡の事に富むに由りて、博く施すを得ん爲なり、此れ我等に由りて神に奉る

かんしゃ な  
感謝を作す。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 少ししかまかない者は、少ししか刈り取らず、豊かにまく者は、豊かに刈り取ることになる。各自は惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく、自ら心で決めたとおりにすべきである。神は喜んで施す人を愛して下さるのである。神はあなたがたにあらゆる恵みを豊かに与え、あなたがたを常にすべてのことに満ち足らせ、すべての良いわざに富ませる力のあるかたなのである。「彼は貧しい人たちに散らして与えた。その義は永遠に続くであろう」と書いてあるとおりにである。種まく人に種と食べるためのパンとを備えて下さるかたは、あなたがたにも種を備え、それをふやし、そしてあなたがたの義の実を増して下さるのである。こうして、あなたがたはすべてのことに豊かになって、惜しみなく施し、その施しはわたしたちの手によって行われ、神に感謝するに至るのである。

\*\*\*\*\*

【 使徒経 (アポストロス) 334 端 エウレイ書 13 章 7 節～16 節 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦経) <sup>せいしと</sup> 聖使徒パヴェルが <sup>じん たつ</sup> エウレイ人に <sup>しよ よみ</sup> 達する書の讀、

司祭) <sup>つつし</sup> 謹みて <sup>き</sup> 聴くべし、

誦経) <sup>けいてい</sup> 兄弟よ、<sup>なんぢら</sup> 爾等の <sup>きょうどうし</sup> 教導師、<sup>かみ</sup> 神の <sup>ことば</sup> 言を <sup>なんぢら</sup> 爾等に <sup>つた</sup> 傳えし <sup>もの</sup> 者を <sup>きねん</sup> 記念せよ、<sup>かれら</sup> 彼等の <sup>いのち</sup> 生命の <sup>おわり</sup> 終

<sup>かんが</sup> を <sup>み</sup> 鑒みて、<sup>かれら</sup> 彼等の <sup>しん</sup> 信に <sup>なら</sup> 倣え。 <sup>いすす</sup> イスス・<sup>はりすと</sup> ハリストスは <sup>きのう</sup> 昨日、<sup>けふ</sup> 今日、<sup>および</sup> 及び <sup>よよ</sup> 世々に <sup>かわ</sup> 變らざる

<sup>もの</sup> 者なり。 <sup>しゅじゆ</sup> 種種の <sup>こと</sup> 異なる <sup>おしえ</sup> 教に <sup>うご</sup> 揺かざる <sup>な</sup> 勿れ、 <sup>けだし</sup> 蓋 <sup>おんちよう</sup> 恩寵を <sup>もつ</sup> 以て <sup>こころ</sup> 心を <sup>かた</sup> 堅むるは <sup>よ</sup> 善し、

<sup>しょくもつ</sup> 食物を <sup>もつ</sup> 以てするに <sup>あ</sup> 非ず、<sup>これ</sup> 之に <sup>したが</sup> 遵いし <sup>もの</sup> 者は、<sup>これ</sup> 之に <sup>よ</sup> 依りて <sup>えき</sup> 益を得ざりき。 <sup>われら</sup> 我等には <sup>さいだん</sup> 祭壇

<sup>あり</sup> あり、<sup>まく</sup> 幕に <sup>つか</sup> 事うる <sup>ひと</sup> 人は、<sup>こうえ</sup> 此の上の <sup>もの</sup> 物を <sup>くら</sup> 食う <sup>けん</sup> 權なし。 <sup>しさいちよう</sup> 司祭長が、<sup>つみ</sup> 罪を <sup>きよ</sup> 潔むる <sup>ため</sup> 爲に、<sup>ち</sup> 血を

<sup>せいしよ</sup> 聖所に <sup>たづさ</sup> 攜うる <sup>ところ</sup> 所の <sup>けもの</sup> 牲の <sup>たい</sup> 體は、<sup>えい</sup> 營の外に <sup>そと</sup> 焚かる。 <sup>ゆえ</sup> 故に <sup>いすす</sup> イススも、<sup>おのれ</sup> 己の <sup>ち</sup> 血を <sup>もつ</sup> 以て <sup>ひと</sup> 人

<sup>びと</sup> 人を <sup>せい</sup> 聖に <sup>ため</sup> せん爲に、<sup>もん</sup> 門の外に <sup>そと</sup> 於て <sup>くるしみ</sup> 苦を受けたり。 <sup>これ</sup> 是を <sup>もつ</sup> 以て <sup>われら</sup> 我等は <sup>かれ</sup> 彼の <sup>はづかしめ</sup> 辱を <sup>いな</sup> 任い

<sup>て</sup> て、<sup>えい</sup> 營の外に <sup>い</sup> 出でて、<sup>かれ</sup> 彼に <sup>つ</sup> 就くべし。 <sup>けだし</sup> 蓋 <sup>われら</sup> 我等には <sup>ここ</sup> 此に <sup>つね</sup> 恒に <sup>そん</sup> 存する <sup>まち</sup> 邑なし、<sup>すなわち</sup> 即將 <sup>しょうらい</sup> 將來

<sup>もの</sup> の <sup>もと</sup> 者を <sup>ゆえ</sup> 求む。 <sup>われら</sup> 故に <sup>かれ</sup> 我等は <sup>よ</sup> 彼に <sup>つね</sup> 由りて、<sup>さんび</sup> 恒に <sup>まつり</sup> 讚美の <sup>かみ</sup> 祭を <sup>ささ</sup> 神に <sup>すなわち</sup> 獻ぐべし、<sup>な</sup> 即將 <sup>さん</sup> 彼の名を <sup>さん</sup> 讚

<sup>えい</sup> 榮する <sup>くち</sup> 口の <sup>み</sup> 果なり。 <sup>ほど</sup> 恵施を <sup>な</sup> 爲し <sup>きょうあい</sup> 共愛を <sup>おこな</sup> 行う <sup>わす</sup> を <sup>な</sup> 忘るる <sup>けだし</sup> 勿かれ、<sup>ごと</sup> 蓋 <sup>まつり</sup> 此くの <sup>かみ</sup> 如き <sup>かみ</sup> 祭は <sup>かみ</sup> 神

<sup>よろこ</sup> の <sup>ところ</sup> 悦ぶ <sup>ところ</sup> 所なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。神の言をあなたがたに語った指導者たちのことを、いつも思い起しなさい。彼らの生活の最後を見て、その信仰にならないなさい。イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変わることがない。さまざまな違った教によって、迷わされてはならない。食物によらず、恵みによって、心を強くするがよい。食物によって歩いた者は、益を得ることがなかった。わたしたちには一つの祭壇がある。幕屋で仕えている者たちは、その祭壇の食物をたべる権利はない。なぜなら、大祭司によって罪のためにささげられるけもの血は、聖所のなかに携えて行かれるが、そのからだは、営所の外で焼かれてしまうからである。だから、イエスもまた、ご自分の血で民をきよめるために、門の外で苦難を受けられたのである。したがって、わたしたちも、彼のはずかしめを身に負い、営所の外に出て、みもとに行こうではないか。この地上には、永遠の都はない。きたらんとする都こそ、わたしたちの求めているものである。だから、わたしたちはイエスによって、さんびのいけにえ、すなわち、彼の御名をたたえるくちびるの実を、たえず神にささげようではないか。そして、善を行うことと施しをすることとを、忘れてはいけぬ。神は、このようないけにえを喜ばれる。

\*\*\*\*\*

司祭) <sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>へいあん</sup> に平安、

誦經) <sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>しん</sup> の神にも、ア ril l i ya、

【 ア ril l i ya 主日第1調 第七全地公会の記憶 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

ア ril l i ya、ア ril l i ya、

ア ril l i ya。

誦經) <sup>ねが</sup> 願わくは <sup>わ</sup> 我が <sup>ため</sup> 爲に <sup>あだ</sup> 仇を <sup>かえ</sup> 復し、 <sup>われ</sup> 我に <sup>しょみん</sup> 諸民を <sup>したが</sup> 従わしむる <sup>かみ</sup> 神は <sup>さんしょう</sup> 讃頌せられん、

ア ril l i ya、ア ril l i ya、

ア ril l i ya。

誦經) <sup>しょしん</sup> 諸神の <sup>かみしゅ</sup> 神主は <sup>ことば</sup> 言を出して <sup>いだ</sup> 地を <sup>ちめ</sup> 召す、 <sup>ひい</sup> 日の出づる <sup>ところ</sup> 處より <sup>ひい</sup> 日の入る <sup>ところ</sup> 處に至る、



司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いぎぎよ ひかり かがや わ しねん</sup>人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念  
<sup>め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup>の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を  
<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ</sup>畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所  
<sup>おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup>を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、  
<sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん</sup>爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし  
<sup>いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ</sup>て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。 )

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書30端 7章11~16節 】

司祭) <sup>えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん</sup>睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) <sup>でん せいふくいんけい よみ</sup>ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) <sup>つつし き か とき な まち ゆ そのもんと たにんおよ おお</sup>謹みて聴くべし、彼の時イイスス、ナインと名づくる邑に往けるに、其門徒の多人及び衆  
<sup>たみ かれ とも ゆ まち もん ちか とき かしこ ししゃ か いだ はは</sup>くの民は彼と偕に行けり。邑の門に近づきし時、彼處に死者の昇き出さるるあり、母の  
<sup>ひとり こ そのはは やもめ まち たみおお かれ とも しゅかれ み あわれ かれ</sup>獨の子にして、其母は嫠なり、邑の民多く彼と偕にせり。主彼を見て、憫みて、彼

い な なか すなわちちか ひつぎ ふ か ものとどま かれい わかき  
 に謂えり、哭く勿れ、乃 近づきて、櫛に觸れたれば、昇く者 止れり、彼曰えり、少  
 もの なんぢ い お ししやお ざ かつい これ そのはは あた しゆう  
 者よ、爾に謂う、起きよ。死者起きて坐し、且言えり、イイスス之を其母に與えたり。衆  
 みなおそ かみ さんえい い おおい よげんしゃ われら うち おこ かみ そのたみ かえり  
 皆懼れて、神を讚榮して曰えり、大なる預言者は我等の中に興れり、神は其民を眷  
 みたり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) そののち、間もなく、ナインという町へおいでになったが、弟子たちや大ぜいの群衆も一緒に行った。町の門に近づかれると、ちょうど、あるやもめにとってひとりむすこであった者が死んだので、葬りに出すところであった。大ぜいの町の人たちが、その母につきそっていた。主はこの婦人を見て深い同情を寄せられ、「泣かないでいなさい」と言われた。そして近寄って棺に手をかけられると、かついでいる者たちが立ち止まったので、「若者よ、さあ、起きなさい」と言われた。すると、死人が起き上がって物を言い出した。イエスは彼をその母にお渡しになった。人々はみな恐れをいだし、「大預言者がわたしたちの間に現れた」、また、「神はその民を顧みてくださった」と言って、神をほめたたえた。

\*\*\*\*\*

【 福音經 (エヴァンゲリオン) イオアン福音書 56 端 17 章 1~13 節 】

司祭) イオアン傳の聖福音經の讀、謹みて聽くべし、彼の時イイスス、其目を天に擧げて曰  
 えり、父よ、時至れり、爾の子を榮せよ、爾の子も爾を榮せん爲なり、蓋爾は  
 かれ およそ にくたい うえ けん あた にかれ およ なんぢ にかれ あた もの えいえん いのち  
 彼に凡の肉體の上の權を與えたり、彼が凡そ爾の彼に與えし者に永遠の生命  
 を與えん爲なり。永遠の生命とは、即爾、獨一の眞の神、及び爾が遣し  
 しイイスス ハリストスを知ること是なり。我已に爾を地に榮し、爾が我に與えて行  
 わしむる事を成せり。今爾父よ、我をして爾に在りて榮を享けしめよ、即創世の  
 さき わ なんぢ あ たも えい なんぢ よ うち われ あた ひとびと われなんぢ  
 先に我が爾に在りて有ちたる榮なり。爾が世の中より我に與えし人人に、我爾の  
 な あらわ にかれら なんぢ ぞく なんぢかれら われ あた にかれらなんぢ ことば まも  
 名を顯せり、彼等は爾に屬し、爾彼等を我に與えたり、彼等爾の言を守れり。  
 いまかれら およ なんぢ われ あた もの みななんぢ し けだしわれ なんぢ われ あた  
 今彼等は凡そ爾が我に與えし者、皆爾よりするを知れり、蓋我は爾が我に與  
 ことば にかれら あた にかれらこれ う かつわれ なんぢ い まこと し またなんぢ  
 えし言を彼等に與えたり、彼等之を受け、且我が爾より出でしを誠に知り、亦爾  
 われ つかわ しん われ にかれら たため いの よ たため いの すなわちなんぢ われ あた  
 が我を遣ししを信ぜり。我は彼等の爲に祈る、世の爲に祈らず、乃爾が我に與  
 もの たため けだしかれら なんぢ ぞく およ われ ぞく もの なんぢ ぞく なんぢ ぞく  
 えし者の爲なり、蓋彼等は爾に屬す。凡そ我に屬する者は爾に屬し、爾に屬

する者は我に屬す。我は彼等の中に榮せられたり。我は是より世に在らず、彼等は世に  
 在り、我爾に往く、聖なる父よ、爾が我に與えし者は、爾の名に因りて之を守り  
 て、彼等を我等の如く一と爲らしめよ。我彼等と偕に世に在りし時、爾の名に因りて彼  
 等を守れり、爾が我に與えし者は、我之を守り、其中一も亡びず、惟沈淪の子  
 は亡びたり、聖書の應うを致す。今我爾に往く、我世に在りて之を言う、彼等が己  
 の内に我の全き喜を有たん爲なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) その時イエスは天を見あげて言われた、「父よ、時がきました。あなたの子があなたの  
 の栄光をあらわすように、子の栄光をあらわして下さい。あなたは、子に賜わったすべての者に、  
 永遠の命を授けさせるため、万民を支配する権威を子にお与えになったのですから。永遠の命とは、  
 唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ること  
 であります。わたしは、わたしにさせるためにお授けになったわざをなし遂げて、地上であなたの  
 の栄光をあらわしました。父よ、世が造られる前に、わたしがみそばで持っていた栄光で、今み前  
 にわたしを輝かせて下さい。わたしは、あなたが世から選んでわたしに賜わった人々に、み名をあ  
 らわしました。彼らはあなたのものでありましたが、わたしに下さいました。そして、彼らはあな  
 たの言葉を守りました。いま彼らは、わたしに賜わったものはすべて、あなたから出たものである  
 ことを知りました。なぜなら、わたしはあなたからいただいた言葉を彼らに与え、そして彼らはそ  
 れを受け、わたしがあなたから出たものであることをほんとうに知り、また、あなたがわたしをつ  
 かわされたことを信じるに至ったからです。わたしは彼らのためにお願いします。わたしがお願い  
 するのは、この世のためではなく、あなたがわたしに賜わった者たちのためです。彼らはあなた  
 のものなのです。わたしのものは皆あなたのもの、あなたのもものはわたしのものです。そして、わ  
 たしは彼らによって栄光を受けました。わたしはもうこの世にはいなくなりますが、彼らはこの世  
 に残っており、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに賜わった御名によって彼らを守  
 って下さい。それはわたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためであります。わたしが  
 彼らと一緒にいた間は、あなたからいただいた御名によって彼らを守り、また保護してまいりまし  
 た。彼らのうち、だれも滅びず、ただ滅びの子だけが滅びました。それは聖書が成就するためでし  
 た。今わたしはみもとに参ります。そして世にいる間にこれらのことを語るのは、わたしの喜びが  
 彼らのうちに満ちあふれるためであります。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは  
 主 光 榮 爾 歸 光 榮  
 はなんぢにきす。  
 爾 歸

※聖体礼儀③（金ロイオン聖体礼儀）へ